

わたしの京都

長谷八幡宮—左京区岩倉

河野裕子

岩倉のこの家に引越してきてから今年で六年目である。今まで数えきれないほど引越しをしてきたが、この家が一番住み心地がいい。

長谷八幡宮が近くにある。お宮の鳥居内に暮らしているという感覚は不思議なものだ。家の北と東は竹藪で、狸が出てくれば狐も猿も出る。住み慣れない頃はこわかったが、この頃はもうあまり感じなくなった。この竹藪の続きに、歌枕で有名な八塩の岡があり、いはくらややしほ染めたるもみぢ葉を長谷川にをしひたしたる

西行法師「夫木和歌抄」

と、西行もここを詠んでいる。歌意は「岩倉の何度も布を染めたように色鮮やかな紅葉を、

長谷川の水に押し浸して愛でたことよ」とでもなるうか。八塩というからには、よほど紅葉の美しい場所だったのだろうが、今は竹や櫟の木が茂っているばかりで当時の面影はない。

引越して初めての夏を迎えるころ、夕暮れになると、藪のむこうの方から鳥の音が聞こえてくるようになった。夜になっても鳴き続け、明け方になってもまだ聞こえる。鳥の声は、わが家の大きな棕の木から聞こえることもあった。棕の木から長谷八幡の方へ飛び、明け方には家の前の田んぼの彼方へ回りこんで行くようであった。ホーホーと鳴き、ひと呼吸おいてまたホーホーと鳴く。何鳥だろうと気になってしかたがない。電子辞書を引い

て、やっと正体がわかった。声を聞かせてくれる電子辞書は、こういう時にありがたい。青葉木菟だった。

どうにかして青葉木菟の姿を見たいものだと思つた。居るとしたら、長谷八幡にちがいない。わたしは毎日のように境内の木を一本ずつ探し歩いたが、ある日、古い樅の木の枝に、静かな黒い細身の鳥影を見つけたことができた。ただ黒いシルエットは、鳥影としかいいようがない。けれど、よくよく見ていると、くつきりと丸い金色の目が見えた。不思議な目だった。

青葉木菟風に揺られてあたりけり昨日と
同じ樅の枝にゐて

「歩く」

声は聞こえても、青葉木菟を見る機会は無かったにあるものではない。ひとりで見ているのは惜しいと思ひ、家族を連れて行つて木の下でひそひそ言つたのがよくなかつたのである。次の日にはもう居なくなつてしまつた。

一昨年の大晦日おみそかの夜の年越しの祭りには家族で出かけた。前年にも見かけたので、もしかしらと話しているところに、近所の鶴見俊輔さんが石段を上つて来られた。年越しの祭りは、そのまま初詣はつもうでになる。除夜の鐘が鳴りだすと参拝客が途端に増えだす。

「あなた、病氣をして顔がやさしくなりましたね」と鶴見さんはおっしゃつた。私は大きなマスクをかけていたのだつたが、氏にそんなふうに見えたことが不思議な気がした。

長谷八幡宮は千二百年近くの歴史を持つ。長谷八幡神社とも呼ばれる。神官は居ないのに、いつ行つても境内は静かで、きれいに掃き清めてある。長谷、花園など町の氏子が交代で掃除をしているからなのだ聞いて、ああそうかと思つた。

この家に暮らしながら、いつも長谷八幡のことが意識のどこかにあるのはどういふ事なのだろう。家の西側二百メートルほどの所に石の大鳥居がある。この鳥居をくぐる度に何とも言ひ表し難い思いがするのである。鳥居の内。それはどういふことなのだろう。石の大鳥居だけではなく、これより少し小さい鳥居が家の南と東にひとつずつある。三方を鳥居で囲まれる暮らしをすることになるなど考

えたこともなかつた。おまけに家の半分は敷である。

この不思議としか言ひようのない感じ。怖いような、安心なような、何かに守られていゝような、悪いことをしてはいけないような、めつたに行つてはいけないような、朝夕ころやすく行けるような。

境内にしばらく行かず行かざれば寒い風見ゆ長谷八幡
十字路の奥に朱色の鳥居あり来ては
いけないと氣配に言へり

「短歌」二〇〇三年二月号

話は前後するが、まあこんな気分だったので年越しの祭りも初詣でも行かなかつたのである。

この家に住み始めたころ、夫の永田和宏がおれたちはこの家で死ぬんやなあと言ひながら、庭の棕櫚しゅろの木の徒長枝を切り始めたことが忘れられない。この家はたぶん終つひの住すま処かになるのである。竹藪と長谷八幡を畏れこわがり、逃げ込んだり安心したりしながら、不思議な京都の北の端つこに來て暮らしているのが、われながら不思議である。

(かわの・ゆうこ「塔」選者)